

国際環境計画からみた幸福度と 学生の幸福感についての一考察

吉 田 肇*

1. はじめに

人の幸せの感じ方には色々な要素があり、国や個人、地域によっても大きく変わるとされている。一方、わが国においては、内閣府「国民生活に関する世論調査」で、毎年「現在の生活にどの程度満足しているか」を訊ねており、最新の調査結果（2015年6～7月、全国20歳以上の日本国籍を有する者1万人を対象に実施）では、「満足」とする者の割合が70.1%（「満足している」10.1%+「まあ満足している」60.0%）、「不満」とする者の割合が29.0%（「やや不満だ」23.0%+「不満だ」6.0%）となっている。そこで、本研究では、ネットで入手可能な世界の幸福度調査結果や様々な社会経済指標を用いて、GDPや所得だけでは説明できない国民の幸福感をさぐるとともに、東洋大学の学生が実際に感じている幸福感についてもアンケートを実施してその要因分析を試みた。

キーワード：幸福度、GDP、人間開発指数、アンケート調査

2. 幸福研究の事例

幸福度の決定要因としては、十分な（それでいて過剰でない）所得、就業状態、健康、安定的な結婚生活、子どもの有無、教育などの「社会経済的属性」と年齢や性別などの「個人的属性」とが指摘されており、特に、所得、就業状態、健康、結婚生活が幸福度と正の相関があること、女性の方が男性よりも幸福度が高いと報告されている。また、GNP（Gross National Product）、GDP（Gross Domestic Product）は国の経済規模や経済発展を測る指標として定着しているが、経済万能主義は誤りだとして、それに代わる発展の指標がかねてより追究されている。例えば、1972年、ブータン王国のジグミ・シンゲ・ワンチュク国王は、単なる「開発」ではなく、少しでも「幸せ」を増加させることを国家の使命とすべきとして、「国民総幸福量」（GNH；Gross National Happiness）という概念を提唱し、①心理的幸福、②健康、③教育、④文化、⑤環境、⑥コミュニティ、⑦良い統治、⑧生活水準、⑨自分の時間の使い方——の9つの構成要素について聞き取り調

*宇都宮共和大学シティライフ学部：The Faculty of City Life Studies, Utsunomiya Kyowa University

査を行っている。このうち、①心理的幸福など、GDPでは計測できない要素も取り上げている。

「幸福研究」には、幸福をどのくらい感じているかを直接的に答えてもらう「主観的幸福研究」と客観的なデータを用いて間接的に幸福度を測る「客観的幸福研究」がある。本研究では、主観的幸福研究のうち、共通の調査票により各国の意識調査を実施した「世界価値観調査」(World Value Survey)を取り上げる。同調査は、世界の大学・研究機関の研究グループにより、1981年から5年ごとに実施されており、各国で18歳以上の男女1,000~3,500名からの回答数が得られている。

一方、客観的幸福研究のうち、幸福は所得だけでなく、人間及び人間の自由の拡大を基準とするべきであるとの考えに立った、生活の質や発展度合いを示す「人間開発指数」(HDI; Human Development Index)という指標がある。毎年、国際連合開発計画(UNDP)により算出・報告されており、各国の所得水準、平均寿命、教育水準などに基づいて計算されている。このほかの客観的な幸福度指標には、「より良い暮らし指標」(Better Life Index)、「世界幸福度」(World Happiness)、「国民総幸福量」(Gross National Happiness)などがあり、経済・貧困分野、教育分野、健康・環境分野、生活・社会分野の複数の因子を表す4~11の指標から構成されている。(表2-1)

表2-1 主な幸福度指標とその構成因子

指標名	人間開発指数 (Human Development Index)	より良い暮らし指標 (Better Life Index)	世界幸福度 (World Happiness)	国民総幸福量 (Gross National Happiness)
研究機関	United Nations Development Programme (国際連合開発計画)	OECD (経済協力開発機構)	UN (国際連合) の Sustainable Development Solutions Network	ブータン国立研究所
経済・貧困	・購買力平価で計算した1人当たりGDP (国民総生産)	・所得 ・雇用	・国民1人当たりの実質GDP (国民総生産)	
教育	・成人識字率 (15歳以上) ・複合初等・中等・高等教育総就学率	・教育と技能		・教育 ・文化
健康・環境	・出生時平均余命 (平均寿命)	・健康状態 ・環境の質	・健康寿命	・健康 ・環境
生活・社会		・住宅事情 ・地域社会、社会的つながり ・市民関与とガバナンス ・生活の満足度 ・個人の安全性 ・ワークライフバランス	・個人の人生選択の自由度 ・社会的支援 ・寛容度 ・汚職レベルの低さ ・政治的自由度	・心理的幸福 ・コミュニティ ・良い統治 ・生活水準 ・自分の時間の使い方
備考	1990年、インド人経済学者のアマルティア・セン及びパキスタン人経済学者のマズブール・ハルハックが開発。	OECD36か国間の暮らしの計測、比較を可能にするインタラクティブな指標。	世界各国の世論調査に基づいて、158か国を対象にして統計的処理を加えたランキング。	1972年、ブータン王国国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクの提唱により国の政策に活用されている。

出所：岡部 (2015) 「幸福度指標をめぐる最近の展開と課題」 P.3、各種ウェブサイト等を参考に著者作成。

3. 社会経済指標と幸福度（ケース・スタディ）

3-1 「世界価値観調査」にみられる各国の幸福度

「世界価値観調査（2010年期）」から得られる幸福度については、各国で「Very happy」と「Rather happy」と回答した回答率の合計とした（母数の合計には無回答、「分からない」を含む）。「Very」（非常に）や「Rather」（やや）が各国の言語でニュアンスが異なり、その区分には言語上のバイアスが働く可能性があるため、本研究では「Happy」か否かで判断することにした。

同調査では各回で実施する国が異なっており、2010年期（2010～2014年）の調査では、61の国と地域が対象となっている。このうち、幸福度が最も高かったのは、カタール（98.0%）であり、アイスランド、マレーシア、ウズベキスタン、キルギス、ベルギー、スウェーデンなどが続いている。逆に幸福度が最も低かったのはエジプトで、26.0%という極端な低さが注目される。人が幸せを感じるには、「安全、安心で、安定した生活」が送れていることが前提とされているが、折しも、2010～2012年にかけてエジプトなどで騒乱が発生した「アラブの春」（Arab Spring）によるものと考えられる。続いて低い国は、ベラルーシ（63.7%）、イラク（68.0%）、ウクライナ（68.1%）などとなっており、幸福度70%未満の国は6か国で、「中東・北アフリカ」「東欧・ロシア」に位置する国であった。日本の幸福度86.5%は、58か国中27位と半分よりやや上の水準であることがわかった。

3-2 社会経済指標と幸福度

本研究では、代表的な経済社会指標である2012年の1人当たり国民総所得（GNI；Gross National Income）と、それを含んで算出された発展度合いを示す2012年の「人間開発指数」（HDI）が、各国の幸福度（「世界価値観調査（2010年期）」で、実際に「幸せである」と回答した回答率）とどのように関係しているのかをプロットした。（図3-1、図3-2）様々な国・地域が含まれているため、ばらつきが大きく、1人当たり国民総所得が1,000米ドル以下やHDIが0.5程度でも幸福度が90%以上の国があるなど、特異的に幸福度の低いエジプトを除いても明確な相関関係は認められなかった（1人当たり国民総所得との相関係数は $R=0.278$ 、HDIとの相関係数は $R=0.240$ ）。しかしながら、図中に破線で示した通り、両指標とも一定の水準になると、それ以降は幸福度は低下せず概ね90%以上までに収束していくようにみとれる。

次に、HDIの指数値の範囲（0.55未満／0.55～0.7／0.7～0.8／0.8以上）と幸福度の範囲（70%未満／70～80%／80～90%／90%以上）をそれぞれ4区分して、各国・地域の分布をマトリックスで整理した。各セルには、幸福度が

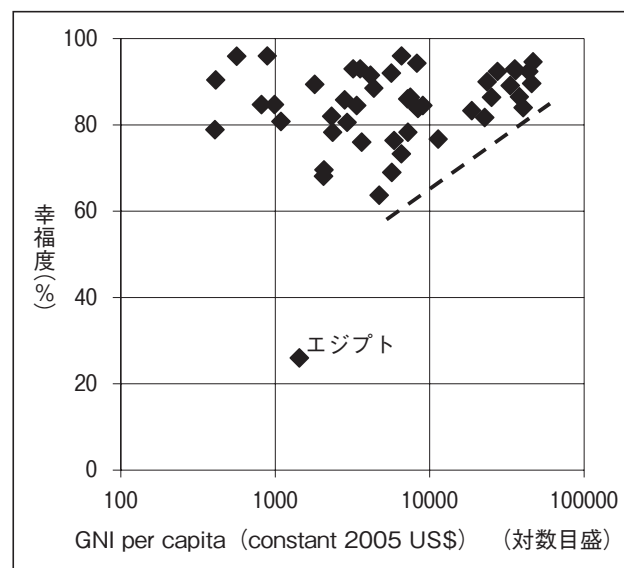


図3-1 1人当たりGNIと幸福度の関係

出所：「世界価値観調査」、「世界開発指標（WDI）データセット」より著者作成。

高い順に国・地域を記載した。(表3-1)。

このマトリックスでは、ばらつきはあるものの、全体としてはHDIの指数値が高くなるにつれて、幸福度も上がっていく傾向がうかがわれる。幸福度の高い国は、西欧、北米・オセアニア、南米、アジアに多く、東欧・ロシア、中東、アフリカで少なくなっている。また、米国や日本、ドイツはHDIが0.8以上のHDI最高位国(先進国)であるにもかかわらず、幸福度があまり高くない。

東欧・ロシア、中東・北アフリカに属する国の中では、それぞれHDIの指数値と幸福度は概ね正の相関を示しているが、アジアや南アメリカには、ウズベキスタン、キルギスタン、ルワンダなどのようにHDI指数値が低い割には幸福度がきわめて高い国が散見される。このように、幸福の感じ方は大陸や国情、国民性などによってかなり異なることがわかる。

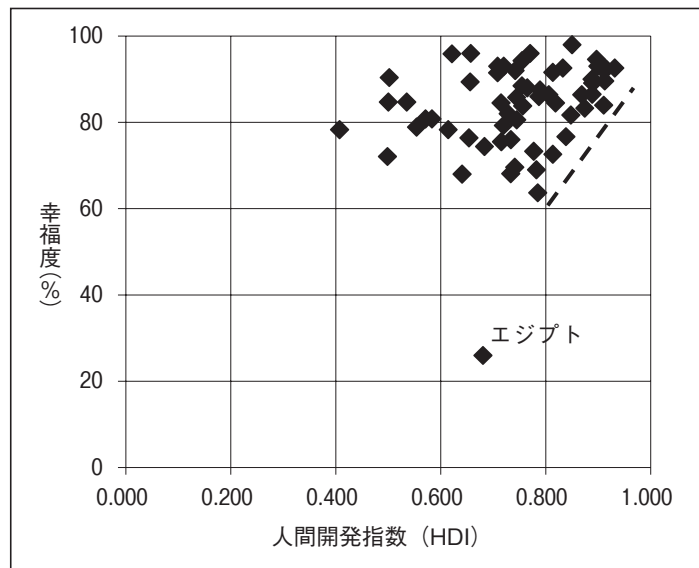


図3-2 HDIと幸福度の関係

出所：「世界価値観調査」、「世界開発指標 (WDI) データセット」より著者作成。

表3-1 HDIの高低と幸福度による各国の分布(2010~2014年)

※数値は幸福度(単位:%)

HDI 区分	Low human development (HDI 0.55 未満)		Medium human development (HDI 0.55 以上)		High human development (HDI 0.7 以上)		Very high human development (HDI 0.8 以上)	
幸福度 90%超			Uzbekistan	96.0	Malaysia	96.0	Qatar	98.0
			Kyrgyzstan	95.9	*Mexico	94.3	*Sweden	94.6
					Thailand	93.0	Singapore	93.0
					Ecuador	93.0	*Poland	92.6
							*Australia	92.6
							*Netherlands	92.4
					Brazil	92.0	*New Zealand	92.4
					Colombia	91.5	Kuwait	91.6
	Rwanda	90.4				*South Korea	90.0	
幸福度 80~90%			Philippines	89.4	Kazakhstan	88.5	*United States	89.6
					Trinidad and Tobago	88.0	Hong Kong	89.1
					Libya	87.5	*Japan	86.5
					Uruguay	86.0	*Spain	86.4
					Jordan	85.8	Argentina	86.4
		Pakistan	84.7		China	84.5	*Chile	84.5
		Nigeria	84.7		*Turkey	83.8	*Germany	84.0
				India	80.8	Armenia	82.0	*Slovenia
幸福度 70~80%			Zimbabwe	78.9	Tunisia	79.3		
	Lebanon	78.3	Morocco	78.3	Peru	76.0	*Estonia	76.7
			South Africa	76.4	Algeria	75.5		
	Yemen	72.1	Palestine	74.4	Russia	73.3	Bahrain	72.6
幸福度 70%未満					Georgia	69.6		
					Romania	69.0		
			Iraq	68.0	Ukraine	68.1		
					Belarus	63.7		
			Egypt	26.0				

注: OECD加盟国には*印を付した。また、アジアに属する国には網かけを付している。

出所: 「世界価値観調査」、「世界開発指標(WDI) データセット」より著作作成。

4. 幸福度学生アンケート調査結果

4-1 アンケート調査の概要

著者は、2011年秋学期、2013年春学期、2015年春学期と、隔年開講で「国際環境計画入門」の非常勤講師を担当している。シラバスのうち、第3講「健康、環境と開発の相互関係」では、主要国別の幸福度と国内総生産(GDP)との関係などについても学生たちと考えるようにしている。

そして、講義の後に、受講者を対象として、「あなたは幸せですか」と訊ねるアンケート調査を実施している。

これまで、内閣府「生活白書」などでは、「学生は働いている人や失業中の人など他の人よりも幸福」「女性は男性よりも平均的に幸福」とされているが、本稿では、2015年春学期に実施した学生アンケート調査結果を集計し、男女の違いや学生の幸福度を形成する因子などを探った。

4-2 幸福度学生アンケート調査結果の概要（2015年春学期）

実施したアンケート調査の実施概要は、表4-1の通りである。本研究では、学生が幸福をどのくらい感じているかを直接的に答えてもらう主観的幸福度とし、「世界価値観調査」に準じて4つの選択肢から選んでもらい、併せてそう感じる理由を1行程度で自由記入してもらう形式とした。

表4-1 幸福度学生アンケート調査の実施概要

- 実施日：2015年4月25日（土）
- 調査対象：2015年度春学期開講「国際環境計画入門」受講者103名（うち、国際地域学部54名、社会学部43名、社会学部4名、法学部2名）
- 調査方法：講義後、受講者に聴講シートを配付、その場で記入してもらい回収。
- 調査項目：設問「あなたは幸せですか？（1つだけ○印で囲む）」
 1. 非常に幸せ
 2. やや幸せ
 3. あまり幸せでない
 4. まったく幸せでない
 5. わからない
 理由（ ）
- 有効回答数：有効回答数103サンプル。（うち、男性78サンプル、女性25サンプル）

幸福度学生アンケート調査の集計結果は、「1. 非常に幸せ」22%、「2. やや幸せ」51%、「3. あまり幸せでない」17%、「4. まったく幸せでない」3%、「5. わからない」7%となり、「やや幸せ」が過半を占めている。一方、「世界価値観調査」による日本の調査結果では、「1. 非常に幸せ」32%、「2. やや幸せ」54%、「3. あまり幸せでない」9%、「4. まったく幸せでない」1%、「5. わからない」3%となっており、「やや幸せ」の比率はほぼ同じであるが、学生アンケートでは「非常に幸せ」が10ポイント少なく、「あまり幸せでない」が8ポイント、「わからない」が4ポイント高くなっている。また、学生アンケートでは、「非常に幸せ」と「やや幸せ」を合わせると73%になっており、「世界価値観調査」による86%より低くなっている。これは、第2～3講の中で、世界各国の経済（貧富）や健康などを学んでいるため、世界の状況との比較において回答しており、ややバイアスがかかっていることも考えられる。

さらに、「非常に幸せ」と回答した女性が4割近くおり、「まったく幸せでない」「わからない」との回答はゼロであった。男性より女性の幸福感が高くなっているのは、多くの内外の既往研究でも指摘されており、本アンケートでも同様の傾向となった。（図4-1）

次に、学生たちの幸せの要因分析を試みるため、「非常に幸せ」と「やや幸せ」と回答した学生たちが自由記述した理由欄の内容について、本研究では前野メソッドに基づいて「幸せの4つの因子」（①自己実現と成長の因子、②つながりと感謝の因子、③前向きと楽観の因子、④独立とマイペースの因子）と照合・分類して、男女別にこれら4つの因子の内訳を試みた。この結果、男女とも4つの因子のうち「自己実現と成長の因子」を理由に挙げる学生が半数以上いること、女子学生

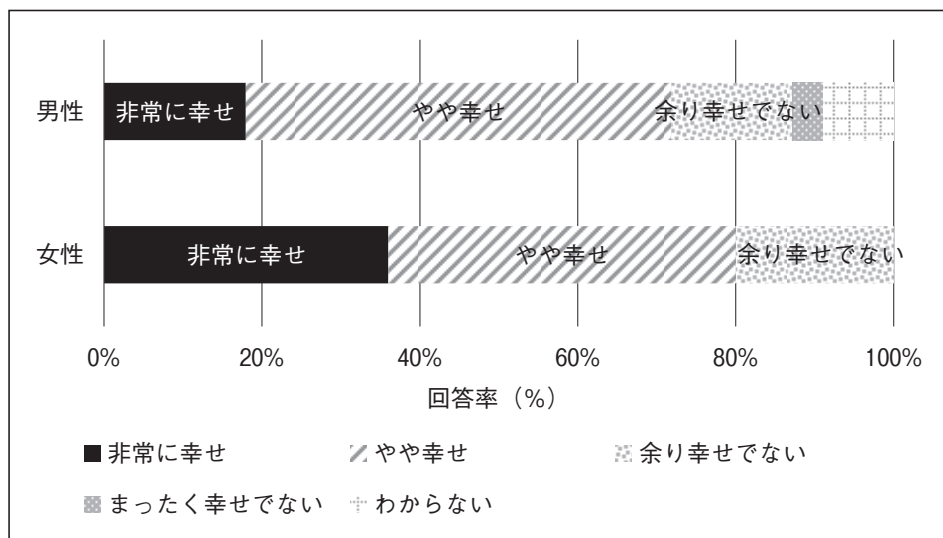


図4-1 男子学生及び女子学生の感じている幸福度 (2015年春)

には「非常に幸せ」の理由として「つながりと感謝の因子」を挙げる割合が20%と男子学生の同11%の約2倍になっていること、男子学生には「独立とマイペースの因子」を挙げた回答が5%あったが女子学生には見られなかったこと——などがわかった。(図4-2)

なお、「幸せの4つの因子」は、前野(2013)が1,500名を対象に心的特性について29項目87個の質問をアンケートし、解析ソフトSPSSを用いて因子分析して抽出したもので、その概要は表4-2の通りである。

表4-2 「幸せの4つの因子」と関連の深い内容例 (前野による)

4つの因子	関連の深い内容例
第1因子「やってみよう因子」 (自己実現と成長の因子)	<ul style="list-style-type: none"> ・コンピテンス (私は有能である) ・社会の要請 (私は社会の要請に答えている) ・個人的成長 (私のこれまでの人生は、変化、学習、成長に満ちていた) ・自己実現 (今の自分は、「本当になりたかった自分」である)
第2因子「ありがとう因子」 (つながりと感謝の因子)	<ul style="list-style-type: none"> ・人を喜ばせる (人の喜ぶ顔が見たい) ・愛情 (私を大切に思ってくれる人たちがいる) ・感謝 (私は人生において感謝することがたくさんある) ・親切 (私は日々の生活において、他者に親切にし、手助けしたいと思っている)
第3因子「なんとかなる因子」 (前向きと楽観の因子)	<ul style="list-style-type: none"> ・楽観性 (私は物事が思い通りにいくと思う) ・気持ちの切り替え (私は学校や仕事での失敗や不安な感情をあまり引きずらない) ・積極的な他者関係 (私は他者との近しい関係を維持することができる) ・自己受容 (自分は人生で多くのことを達成してきた)
第4因子「あなたらしく因子」 (独立とマイペースの因子)	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的比較志向のなさ (私は自分のすることと他者がすることをあまり比較しない) ・制約の知覚のなさ (私に何ができて何ができないかは、外部の制約のせいではない) ・自己概念の明確傾向 (自分自身についての信念はあまり変化しない) ・最大効果の追求 (テレビを観るときは、あまり頻繁にチャンネルを切り替えない)

出所：前野隆司(2013)「幸せのメカニズム 実践・幸福学入門」pp.104-110より作成。

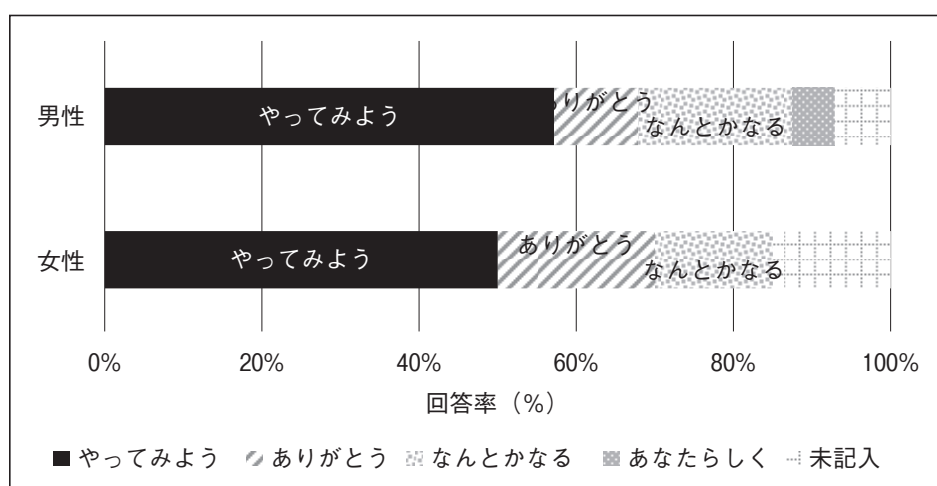


図4-2 「非常に幸せ」「やや幸せ」と感じている学生の幸せの因子の構成 (2015年春)

4-3 過去の調査結果との比較

著者は2013年春学期にも同様の方法でアンケート調査を行ったが、両者を比較してみると2015年春学期の回答結果で「やや幸せ」が増えたものの、概ね同様の結果となった。この調査方法でみる限りにおいて、学生の幸福度には、この2年間で大きな変化は見受けられなかったことがわかる。(図4-3)

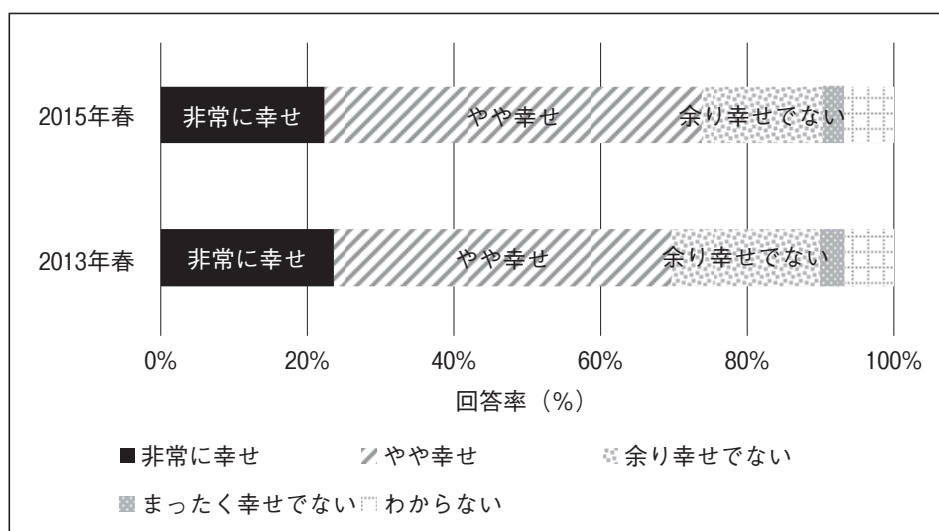


図4-3 幸福度学生アンケート調査結果の比較 (2013年春と2015年春)

5. 考察と今後の検討課題

まず、幸福度指標には様々なものがあるが、幸せを感じているかどうかは1人当たり国民総所得(GNI)や人間開発指数(HDI)とは正の相関が強くはなく、カネで買えるような経済的なもの(所得)だけではなく、大陸、国情、国民性など多くの要因が複合的に絡んでいることが確かめられた。次に、サンプル数は限られているが、簡単な学生アンケートを実施することにより、東洋大学の学生の幸福感の傾向とその要因についてケース・スタディを行うことができた。

今後は、幸福度に関してより広範な社会経済指標を用いた社会科学的なアプローチを図っていくことにより、国際環境計画における厚生政策に新たな視点をフィードバックしていくことが考えられる。また、著者が担当している「国際環境計画入門」においては、世界の健康に焦点をあてて展開しているが、人間の生活の根幹にかかわる人々の健康は、貧困、教育、環境、紛争、政治経済の観点などの多くの分野と複雑に絡み合っているため、今後は健康を含めた幸福度や厚生 (well-being) にも注目していきたいと考えている。

[謝辞]

幸福度学生アンケートは、「国際環境計画入門」を受講した学生諸君の協力により実現した。ここに記して感謝申し上げたい。

[主な参考文献・情報]

- ・ Carol Graham、多田洋介 (訳) 「幸福の経済学」 (日本経済新聞出版社)、pp.19-55
- ・ Worldbank 「世界開発指標 (WDI) データセット」
<http://data.worldbank.org/data-catalog/world-development-indicators>、2015/11/1 アクセス
- ・ 岡部光明 (2015) 「幸福度指標をめぐる最近の展開と課題」 (SFC ディスカッションペーパー)
http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/dp_pdf/14-06.pdf、2015/11/1 アクセス
- ・ 北脇秀敏・関沢純・内田康策監訳 (1993) 「WHO 環境保健委員会報告 ~われらが地球 われらが健康~」 (環境産業新聞社)
- ・ 「世界価値観調査」 ウェブサイト
<http://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp>、2015/11/1 アクセス
- ・ 内閣府経済社会総合研究所 (2013) 「現在の幸福度と将来への希望~幸福度指標の政策的活用~」 (New ESRI Working Paper No.27) pp.3-7
http://www.esri.go.jp/jp/archive/new_wp/new_wp030/new_wp027.pdf、2015/11/1 アクセス
- ・ 内閣府「世論調査」ウェブサイト「国民生活に関する世論調査 (平成 27 年 6 月)」
<http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-life/index.html>、2015/11/1 アクセス
- ・ 本川裕「社会実情データ図録」ウェブサイト、コード 9480 「幸福度の国際比較 (2010 年期)」
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/9480.html>、2015/11/1 アクセス
- ・ 前野隆司 (2013) 「幸せのメカニズム 実践・幸福学入門」 (講談社)、pp.27-94